

NEWS



陸協ひろしまニュース
財団法人 広島陸上競技協会

第67号



高校で飛躍期す
箱田
全中チャンピオン
幸寛

箱田 幸寛

福山市向丘中

Yukihiko Hakoda

高校で飛躍期す 全中チャンピオン

プロフィール | 箱田 幸寛(はこだ・ゆきひろ)

1994年4月30日生まれ / 169cm / 54kg / 福山市千年小→向丘中

主な成績

2007年・全日本中学校通信県大会1年1500m1位、県中学選手権1年1500m1位、中国中学校選手権1年1500m1位 / 2008年・織田記念大会中学3000m1位、全日本中学校通信県大会2年1500m1位、県中学選手権2年1500m1位、中国中学校選手権2年1500m1位、県中学校総体3000m1位、全日本中学校選手権3000m出場、全日本びわ湖クロカン中学生3000m2位 / 2009年・全国都道府県男子駅伝2区11位、国際千葉クロカン中学男子3000m3位、織田記念大会中学3000m1位、全日本中学校通信県大会3年1500m1位、県中学校選手権1500m、3000m各1位、中国中学校選手権1500m、3000m各1位、全日本中学校選手権3000m1位、新潟国体少年男子B3000m出場、ジュニアオリンピックA3000m3位、全日本びわ湖クロカン中学生3000m1位 / 2010年・全国都道府県男子駅伝2区2位、国際千葉クロカン中学男子3000m5位

地元開催の第15回全国都道府県対抗男子駅伝(1月24日)で広島は4年ぶりに入賞を果たし、4位の好成績を挙げた。序盤の失速を捕い、チームが上昇機運へと転じたのは中学生区間2区の箱田幸寛(向丘中)の好走だ。16人を抜いて34位から18位へ。全日本中学チャンピオンの走力を存分に発揮して、広島の窮地を救った。春から高校へ進学、新たな境地を開く。



後続の奮起呼んだ16人抜き

2年連続での2区起用。前回は3kmを8分41秒で駆け抜けた。それでも区間11位。2年生にとって全国の壁はまだ厚かった。それから1年、ひ弱に見えた中学生はたくましく進化を遂げている。「区間賞を取る」「自分でトップに押し上げる」と、強い意気込みでたすきを待った。ところが、広島の1区の到着は遅れた。早くから中継点で待っていた箱田にとって予想外の展開。

トップ集団は無理としても2位グループで来ると思ったので、早めに中継地点に立った。でも、なかなか姿が見えなくて少し焦った。中継点では押し合いへし合いしながら、しっかりと自分の位置を確保していた。その点では去年の経験が生きた。

首位埼玉から53秒後、広島の2区中継は34位だった。優勝を狙うには余りにも大きなビハインド。気を取り直して前方を見据えた。次々

と集団をとらえ、抜き去った。1kmの通過は2分45秒と、予定を3秒上回った。オーバーペース気味となって後半ややスピードが鈍った。それでも区間2位、タイムは前回に1秒及ばぬ8分42秒だった。だが、順位は18位に上昇した。区間賞は福岡の前田晃雄(筑邦西中)の8分39秒で、20人抜きだった。3秒差で区間1位を逃したものの、そのファイトは高い評価に値した。

区間2位だったのは3区へ中継後、テレビ中継で知った。やっぱり悔しかった。自分のレースに徹したつもりだったが、前半のオーバーペースがたたって後半落ちた。自分の受け持ち区間で流れをつくれた訳じゃないが、気持ちは後続につながったと思う。3区の岡本(直己)さんたちみんなの踏ん張りがあって4位になれた。

練習で培った自信、全中で発揮

2区区間賞へのこだわりは、誰よりも強かった。8月の全日本中学選手権男子3000mチャンピオンの意地があった。ランクトップで大分・九州石油ドームに乗り込み、800mで早くも首位に立った。1500mでさらにペースアップすると独走状態に。ピッチを緩めることなく8分37秒11の自己新で優勝を飾った。一方で、秋の新潟国体少年男子B3000mは予選敗退、10月のジュニアオリンピックは3位。秋から不本意なシーズンが続いていた。

夏の全中は勝つ自信があった。馬屋原(浩之)先生の指示した練習がちゃんとこなせていたので不安はなかった。レースは最初、様子を見ていて前に出たらみんな離れていった。前の年に2年で決勝に残っていた経験が役立った。

逆に国体は高校生たちにかき回され、タフなレースになってしまった。ジュニアオリンピックは油断した部分があった。2000mから独走し、逃げ切るつもりだった。しかし、最後の100mでかわされてしまった。気を抜いた訳ではないが…。教訓になった。

向丘中陸上部に男子長距離の同期はいない。だが、孤独だとは思わない。あくまで向上心が宿る。毎朝7時20分の自主練習、放課後のジョグやペース走、インターバルも黙々とこなす。馬屋原監督は2000年の全日本中学校駅伝で誠之中女子を全国優勝に導いた。厳しい指導と情熱が箱田を全国トップに引き上げたのは間違いない。

先生の指導は確かに厳しい。でも自分は走ることが好きだし、苦にはならない。先生の指示してくれる練習内容をきちんとこなすことができれば、おのずからいい結果が出ることは分かっている。だから、1人でのトレーニングも決して手を抜かないようにしている。事実、全中でしっかり走れたのもそのお陰だから。

チームゲームの駅伝は面白い。だが、箱田の真骨頂はトラックレースに表れる。しっかりと腰の入ったフォームから、ぐいぐいと集団をリードする積極性は、豊かな素質をうかがわせる。しかし、相手との駆け引き、勝負どころでのペースアップなどまだまだ覚えるべき内容は多い。

*

高校でさらなる向上を目指す

春から環境は大きく変わる。高校長距離の雄、世羅への進学が決まっている。練習内容



はさらに厳しく、過酷になるであろうことは自覚している。全国のライバルに加え、チーム内での争いも激烈になる。全国高校駅伝優勝校の榮譽に恥じないランナーたちがしのぎを削る。

昨年、京都の高校駅伝優勝はテレビで見ていた。みんなの頑張り、「すごい」の一言だった。自分もきちんと練習をこなして行って、もっと伸びていきたい。まだスピードは足りないが、持ち味の持久力を発揮したい。「速い」ランナーより、「強い」選手を目指したい。

「目標にするランナーはいない」と断言する。ただ、「参考にしたい」のは、中国電力のマラソンランナー、佐藤敦之という。瞬時のペースアップなど五輪選手に学ぶ点は多い。

レース以外ではメガネを着用する全中チャンピオンの視線は高く、遠くを目指している。その高みにどう挑むか。高校長距離界での活躍が待ち遠しい。(敬称略) (W)

「おまえのところで陸上をやりたがっている小学生がおる。しかも、勉強もよくできるそうじゃ。」これが箱田との出会いの最初のきっかけだった。その後、私は右足を負傷し、二度の入院と手術、その後のリハビリというどさくさの中、やっと落ち着いて練習を再開できたのは、箱田が入学して10ヶ月後のことだった。

当時の彼の印象としては持久力は高いがスピードはなく、体力も不十分で、ひ弱な感じを強く受けた。その後、幸いなことに故障もなく体調を崩さず、予定通りの冬季練習を積むことができ、次のシーズンに向けてのワンランク上の体力をつけることができた。

この時点で考えたことは、箱田が3年になった時のピークをどこに持っていかよということの設定と、それに基づいた練習計画の作成だった。基本的には、やり過ぎない。オーバートレーニングを防ぐためでもあり、本人の限界を越える追い込んだ練習は一切しない。常に心と身体にゆとりを持たせた設定にして、「滅茶苦茶きつい、もうこれ以上出来ない」

という練習はさせなかった。1週間の練習サイクルもポイント練習の日と回復の練習の日を交互に入れ、日曜日は完全休養日で陸上の練習はしないという事を原則としてやってきた。結果的に、彼は一度も故障することもなく、走ることが嫌いになることもなく、確実に進化してきたと思う。仮に、もっと詰めた練習を2年間させていれば、彼の潜在能力からして、もっといい結果を残せたことは明らかだ。多少残念ではあるが、現段階ではこれで十分だと思う。

彼の将来の夢は、家業を継いで立派な大工の棟梁になることらしいが、その前にもう一つ、競技として陸上ができる間は、選手として世界の舞台で自分の力を試してみたいという想いを持っている。この先、箱田は競技生活を続けていく。更に自分を磨き、鍛え、激しい共食いの世界を生き抜いて、器の大きい日本人として大成していつてくれることを願っている。

福山市立向丘中学校 陸上駅伝部監督 馬屋原 浩之

皇后盃 全国女子駅伝 天皇盃 全国男子駅伝を終えて

都道府県対抗男女駅伝に思う

強化委員長 中野 繁

「広島県1区34位で中継しました」とアナウンサーの声。今年もダメかなと脳裏をよぎったスタートであった。それ以後の選手が、追わないといけな心理から前半若干のオーバーペースになりながら、自分の持っている力を発揮してくれた結果、男子は4年ぶりの4位入賞を果たすことができた。

一方、女子は昨年の流れが再現できれば、入賞も期待できると意気込んでいたが、「広島県1区31位で中継」それ以後も浮上することなく26位でフィニッシュ。

この男女の違いをどう見るか、分析好きの人はいろんな意見を持つことだろうが、安定した実力を持っているかどうかの違いでしかない。人間はいつもベストタイムで走るわけではなく、ベストに近い状態で走る機会が多い選手が実力ある選手といえる。この点において、男子は実力のあるものが多く、女子はまだ不足していたにすぎない。

はっきり言って、以前は長距離にあまり興味はなかった。強化委員長の立場として強化をいかにすべきかを考えたときに、長距離専門のやりたい者に任せればいいと考えていた。蛇の道は蛇。その蛇が多様で道が定まらない。国体では「チーム広島」でまとまるように指導陣も努力してもらっているが、こと長距離に関しては連携が課題となり、今年中国新聞に大会後提言が載っていた。

これからも大会が続く限り、中高大一般の指導者が連携して真の「チーム広島」になる方向で改革を進め、安定した実力を持った広島県にしなければならない。それには、各方面の協力を再度求めて、意見を出し合って進めていくしかない。来年すぐに結果に結びつかないであろうが、急がば回れで足場を固めていきたい。



写真:中国新聞提供

男子駅伝の幟旗

広島市小体連会長 高津 眞廣

男子駅伝
クローズ
アップ!

広島男子駅伝では、昨年に続き応援手旗に代えて、大きな幟旗を使って選手を激励することとなった。その幟旗の製作は、駅伝大会のコース沿いの小学校に依頼した。

作られた幟旗は、『NHKの駅伝広場』や『中国新聞本社のロビー』に飾られ、大会の盛り上げに一役買った。わざわざそれを見に出かけた子どももいる。大会前日には、監督会議が行われる国際会議場に届けられ、紹介された各県の監督・コーチはその場で制作してくれた小学校にお礼の言葉や力いっばいの激走を誓う言葉などを書き込んでくれた。制作した小学生たちも一生懸命であったが、その期待にこたえようと返事を書く各都道府県の監督・コーチも真剣そのものであった。

大会当日、色とりどりの幟旗は、選手紹介にもひと花を添える形になった。各県人會の方々にも好評で、いつも、きりきりした雰囲気の中で選手紹介が行われる平和記念資料館前も、和やかな雰囲気が加わったように感じた。



全日本実業団対抗駅伝競走大会 ー広島県勢の明と暗ー

広島県実業団陸上競技連盟事務局 中電工 藤本 大輔

第54回全日本実業団対抗駅伝競走大会(ニューイヤー駅伝)が、群馬県で2010年の幕開けとともに行われた。毎年、心配される天候も今年は快晴でのスタート。時より肌を刺す冷たい風が吹くものの、高まる興奮と活気立つ沿道の熱に打ち消された。

広島県からは、中国電力、JFEスチール、マツダ、中電工の4チームが出場した。中国電力は、1区藤森選手が7位と好スタートを切り、2区で順位を下げたが3区から徐々に追いつき、4区佐藤選手・5区岡本選手の連続区間賞でついに3位に浮上。6区で4位に下がり、アンカーの尾崎選手は本来の走りが見られなかったが4位を死守してフィニッシュ。その他、JFEスチールは前半10位台をキープし、中盤20位台に下がったがアンカー小村選手の区間8位の力走で18位と健闘した。また、マツダは1区圓井選手が先頭と5秒差の5位と絶好のスタートを切ったが、中盤のブレーキが後半に影響し、25位でのゴールとなった。1区栗原選手が36位と大きく出遅れた中電工は、その後浮上する事ができず、35位の結果となった。なお、広島県出身の徳本選手(6区 区間2位)が所属する日清食品グループが初優勝を飾った。

マツダ創立90周年悲願の初優勝 第73回中国山口駅伝

マツダ陸上競技部 監督 栗井 勝

2010年1月31日宇部市役所前をスタートし、周南市役所前をゴールとする7区間、84.4キロでドラマは繰り広げられた。会社創立90周年を迎え、全日本実業団駅伝では、昨年の成績を下回り、今回の中国山口駅伝に向け気合を入れなおし臨んだ大会。

我がマツダチームは1区ピーター・カリウキ選手、2区松岡選手、3区圓井選手、4区増田選手、5区藤原選手と5連続区間賞を奪い独走態勢で悲願の初優勝のテープを切る事が出来た。過去東洋工業時代、全日本実業団駅伝2回優勝、中国駅伝5連覇と輝かしい足跡があるチームも低迷期が続き、全日本実業団駅伝には出場できなくなり、部員も8名とギリギリの苦しい時代を乗り越え、選手も徐々に力を付け、今回優勝を勝ち得た事は選手個々にもチームにとっても大きな自信となった。



世羅高校の優勝を考える 「都大路ー高校生の感想」

井口高校 内田 佳巳

僕の所属するチームは、広島県予選と中国大会では世羅高校と一緒に闘った。全国高校駅伝はテレビで観戦したが、世羅高校が強いのは速く走れるということ以外にいくつか理由があると思う。1つは選手と監督との信頼が厚いということ、そして常に周りに対して感謝の気持ちを忘れないということ、更に世羅高校で陸上をする人達は本気で「陸上をやりたい」、「都大路で優勝したい」と思う人ばかりだ。昨年の全国高校駅伝で世羅高校が優勝した際に、メンバーから外れて補欠にまわった人達が「自分が走るよりチームが優勝してほしい」、「自分は駅伝では走れなかったけど、チームが優勝して本当に嬉しい」などと発言していた。このような言葉からいかに世羅高校のチームとしての絆が強いかうかがえる。駅伝を制するにおいて、個人個人に能力があっても結果がなければダメだと思います。逆に優勝した世羅高校は実力NO.1であるのは勿論、日本で最もチームを愛し、チームメイトを信頼している高校と言えるのではないだろうか。私はレース直前に故障してタスキが持てなかった。それだけに、スポットをあげるメンバーを支えてきたチームメイトのコメントが心に響いた。

全国中学校駅伝に出場して

坂中学校陸上部 主将 奥森 由香乃

私たち坂中陸上競技部女子は、中国中学校駅伝で優勝することができ、全国中学校駅伝に出場させていただいた。

私たちは、男子8名、女子6名の少人数で活動している。昨年度は優勝をかけて戦ったが、4位という結果に終わり、とても悔しい思いをした。今年度は必ず優勝して全国駅伝では入賞を目標に毎日真剣に練習に取り組み、秋の県総体では1500mで5人全員が8位入賞を果たすことができた。全国大会当日までは特に体調管理に気を付け、1人も欠けることなく出場することができた。結果は10位で目標としていた8位入賞を果たすことはできなかったが、今まで以上に強い絆が生まれたと思う。来年こそは必ず上位入賞を果たしてほしい。

全国大会に出場できたのはコーチや先生方を始め、支えて下さった方々のお陰であり、本当に感謝している。高校に進学してもこの貴重な経験を生かして感謝の気持ちを忘れずに高い目標に向かって頑張りたい。



▲山口へ駆けつけ、あたたかい声援をおくってくださった坂町のみなさん

年代別レポート

小体連

キッズ駅伝が、中国女子駅伝のサブイベントとして行われるようになって、3年目を迎えた。参加チームも年を追うごとに増え、今回は、県内34団体より55チームの参加があった。

スタート直後からダッシュをかける子、ゆったりと自分のペースで走る子、それぞれの目標をもって、1人およそ1000mを3人がタスキをつないで走りきった。スタート前は、「みんな自分より速そう」「一番最後になったらどうしよう」と不安そうだった子も、走った後はホッとした表情だったのが印象に残る。

こういった場を数多く経験することで、子どもたちの世界が広がる。子どもたちに広い世界を知らせ、多くの経験を積ませることが、おとなの責任だと感じる。それが陸上競技であれば、なおいっそうわたしたちの喜びとなる。

今後、子ども主体・選手主体の大会運営を心がけていきたい。

宇品小学校 金尾 誠可

中体連

10月に行われたジュニアオリンピックは2年男子1500mで城西廉君(世羅西中)が2位、3年男子3000mで箱田幸寛君(向丘中)、3年男子110mHで高山峻野君(中広中)と2年女子100mHで福部真子さん(府中中)が3位、1年男子1500mで山口竜也君(一ツ橋中)が4位、ジャベリックスローで深山達平君(安佐北中)と男子400mRが7位、1年男子走幅跳で丹良本勘太君(七尾中)が8位と8種目の入賞者が出た。その中で男子400mRは昨年度決勝進出を惜しくも逃し、今年度は練習回数を増やし、決勝進出を目標に取り組んできた。広島県としては初の入賞で、選手や指導者・関係者一同も大変喜んだ。これを次の学年へもつなげていきたいと思う。

山口で4年目の全国中学校駅伝は、男子はランキング2番手で優勝候補にもあげられていた。大会は前日から雪が降り、当日も雪混じりの天候で選手には過酷な条件だった。結果的には男子の三原第五中学校は13位、女子の坂中学校は10位と入賞を逃した。インフルエンザ対応で開会式の参加が監督と選手1名のみという寂しい開会

式となった。三原第五中学校の選手・監督がノロウイルスの影響で体調を崩したと聞き、レースで力を出すために練習はもとより、健康管理の重要性を特に感じた。男女とも山口県チームの活躍が非常に印象に残った。

年末には広島県の1・2年生の長距離を選抜して、山口セミナーパークを使って合宿を行っているが、今回は山口県も合宿を行っており、良い刺激になったのではないと思う。長距離を除く中高校生のジュニア合宿を1月4日～6日、2月18日～20日の2回行った。指導者の先生方の技術面のみならず、生活面を含めて選手育成に頑張ってくれている姿勢には大変感謝している。また、新たな指導者育成にもご努力いただき、中学、高校と連携の取れた指導ができていければと思う。

中広中学校 田川 司

高体連

3月は別れ、4月は出会いの季節。悲喜こももである毎年3月は3年間練習を見てきた生徒たちが巣立ち、4月には新たな部員が加入してくる。寂しくもあり楽しみな季節でもある。生徒の出入りにのみならず、公立学校では人事異動というやっかいなものも立ちふさがり。熱心な指導者により築き上げられた伝統というものも、容赦のない人事異動によって簡単に崩れ落ちる。これが世の習わしと言えそれまでであるが、指導者を慕って集まった生徒たちにとっては悲劇であり、それを引き継ぐ後任の苦勞も推して測られる。今年またその時期がやってきた。十分に配慮の行き届いた、マイルドで円滑な人事異動であってほしい。同時に、広島県内の陸上競技の指導者も高齢化の一途を辿っている。若くて元気いっぱい情熱的な指導者の出現を期待している。

井口高校 松崎 親男

学生連盟

今年度を振り返ってみる。今年度は県学連主催の競技会や実業団との合同競技会の運営、そして日本選手権があった。このような学連の仕事を通じ、自らの陸上競技に対する考え方が変わった。これまで、選手として自分がどれだけ強くなれるかを目指してきたが、その力を発揮する場としての大会を運営することが、どれだけ大変なのかを思い知らされた。そして、運営側の努力があったこそ選手は安心して自らのパフォーマンスを最大限に出せるのだと感じた。

この1年を通じて出会えた人たちが培った多くの経験は、すべてが宝物である。広い視野で陸上競技に関わる事ができ、改めて陸上競技のおもしろさを知ることができたように感じる。また、自らを

大きく成長させ、これからも陸上競技に携わっていきたいと思う。広島県の陸上競技の発展の為に、そして広島県の学生選手は日本一だと言われるように、是非これからも県学連が精一杯サポートしていきたい。

中国四国学生陸上競技連盟広島支部 幹事長
広島修道大学 上杉 達也

実業団連盟

出会いと別れの季節がやって来た。陸上競技生活も実業団にまで進めば、ここがラストステージになるだろう。これまでの陸上人生に終止符を打つため、ラストランに臨む選手は、色々な事に対して感謝の気持ちを持って走って欲しい。恵まれた環境の中にいると毎日の生活が当たり前で、つい感謝の気持ちを忘れてしまう。走る自分を常に応援してくれた家族、故障の時に励ましてくれたトレーナーや友人、走る事に専念できるよう動いてくれたスタッフ、走るためのお金と時間を与えてくれた会社など挙げればきりが無い。多くの支えがあって走っていた事に目を向けて欲しい。

また高校・大学の卒業を控え、実業団という新しい環境にワクワクしている新人選手も始める以上は、必ず終わりが来る。時間は有限であり現役選手の間は時間は短い。1日1日を大切に、感謝の気持ちを持って魅力のあるアスリートになって欲しいと願う。

広島県実業団陸上競技連盟 事務局
中電工 藤本 大輔

マスターズ連盟

都道府県対抗男子駅伝に参加された各県の監督さんや指導者の方の思いは「底辺の拡大」へ大きく舵を切る、その思いに尽きると思う。長距離に限る事ではない、長野県に始まり、過去の上位入賞県はこぞジュニアの育成に力を注いできた結果と評価されていると思う。私たち「広島マスターズ陸上」も思いは同じで自分たちのトレーニングの傍ら、ジュニアの育成にも力を注ぎ、生涯スポーツを目指しているのがマスターズ陸上の姿ではないかと思う。

「陸上王国」と言われて久しい広島県であるが、このところ若者男女共、全国レベルには及ばない成績は万人の認めるどころである。何が足りないのか？ どうか、小・中・高・大学・実業団・マスターズまで一貫した拡大プログラムで「陸上王国」復活を目指したいものだ。新しいシーズンを迎え「組織力強化」を図り、益々の発展を祈念しているところである。広島陸協の仲間として「広島マスターズ陸上」今年度もよろしく願い申し上げます。

広島マスターズ陸上 広報 前田 征四郎

アスリートのためのケアトレーニング②

—アスリートの花粉症対策—

いよいよ花粉症の季節到来です。スギ花粉症は現在、国民の5人に1人以上が罹患していると言われています。シーズンを前に涙と鼻汁で辛い日々を過ごしている選手の方もいるのではないのでしょうか？

症状の緩和に手取り早いのは薬物療法です。経口薬の代表格は抗ヒスタミン剤ですが、即効性があるものは眠気が強く出るため、競技やトレーニングに向いているとは思えません。効率よく対処するには、点眼薬や点鼻薬をお勧めします。糖質コルチコイド(ステロイド)を含むものでも局所に限り使用可能なため、TUE申請やドーピング検査時の申告は不要です。小青竜湯(ショウセイリョウトウ)という鼻炎用の漢方薬は、成分中の麻黄(マオ

ウ)という生薬に興奮剤のエフェドリンが含まれているため使用できません。

服装に関しては、静電気を発して空気中の花粉を集めるフリース素材は要注意です。医薬ジャーナルの掲載データによると、一般のマスクの着用で、鼻粘膜上の花粉の量は着用しない時の3分の1に、花粉症用のマスクでは6分の1以下に減らすことができます。また、厚生労働省の報告書によると、メガネを着用しない人の目に入る花粉の量はcmあたり29個でしたが、メガネを着用すると9.8個に、プロテクター付きは1.8個に減らすことができたそうです。スポーツ用サングラスの着用は効果的といえるでしょう。

科学委員会副委員長 川堀 耕史



中国女子駅伝を振り返って

第24回中国女子駅伝競走大会、前日の準備の日はとても寒く、怪しい雲行きで天候が心配された。しかし当日は女性の祈りが天に届き、日射しのある天候のもとで開かれた。女性ランナーがチームのためにたすきをつないで快走した。一般の部では毎年遠来のチームが多数参加して大会を盛りあげてくださっている。今年の申し込みチーム数は、過去最高の33チームであった。しかし、直前に立命館大と如水館クラブが棄権ということで大変残念だった。

一般の部は地元デオデオチームが沿道をわかせてくれ4年ぶりの優勝であった。全国大学女子駅伝優勝の佛教大が2位、全国高校駅伝11位の北九州市立高は主力を欠きながら3位でゴールした。どのチームもシーズン終わりの駅伝大会を楽しんで走ってもらえたのではないかと思います。郡市の部は18チームという盛り上がりであった。その中で激しい優勝争いをした広島市陸協Aが29秒差で三原市体協に勝ち3年ぶりの優勝となった。チーム編成に苦



慮される地域もあるが、選手は参加され走った喜びを感じられたと思う。

この大会の運営は、男性競技役員の大きな力を借りながらも、女性競技役員が中心となって運営している。思い起こしてみれば、第5回大会からこのスタイルである。今年で20回を数える。連続して審判をされている方も何人かおられる。毎回、緊張感をもって担当部署でその任にあたっている。そして毎年若さあふれる大学生競技役員も頑張ってくれている。卒業後も続けてほしいと願っている。また毎年、島根県から競技役員として数名の参加がある。何はともあれ多くの女性競技役員が活躍している県は少ない。また、他の大会でも女性競技役員を大事にくださる県陸協に感謝をし、頑張りたいと思う。

大会総務 竹林 幸江

速報 日本陸連栄章決る!

平成21年度(財)日本陸上競技連盟栄章受賞者

功 労 章	亀 井 郁 夫 (会長)
秩 父 宮 章	佐々木 英 夫 (常務理事・科学委員長)
平沼亮三章	岩 本 真 弥 (世羅高校監督)
河野謙三章	田 川 司 (派遣理事・中広中監督)
春日弘章	北 魁 道 (世羅高校3年)
河野一郎章	箱 田 幸 寛 (向丘中学校3年)

青少年の夢を応援します!

青少年健全育成 協力企業

- 株式会社サタケ
- 広島ガス株式会社
- 株式会社いとや
- 株式会社もみじ銀行
- 旭化成株式会社
- 株式会社福屋
- オタフクソース株式会社
- 広島総合警備保障株式会社
- 広島駅弁当株式会社
- 株式会社イズミ
- 奥アンツーカー株式会社
- 株式会社アシックス
- 株式会社広島銀行
- 中外テクノス株式会社
- 学校法人石田学園
- 中国電力株式会社
- 広島電鉄株式会社
- 株式会社中電工

(順不同)

編集後記 広陸協 BLOG

今年度の広島陸協最大のイベントと言える「日本選手権」が終わってはや9か月となる。この間、広島陸協は、天皇盃全国男子駅伝を始め、多くの競技会を運営し、成功に導いた。日本選手権の開催は、確実に本協会の財産となった。

一方で、運営に携わる人たちの固定化・高齢化も年々進んでいるといわれる。ビッグイベントの招致と成功により、陸協全体の活性化を進めるとともに、運営のノウハウを郡市陸協にも普及させ、人材を育成することが望まれる。(Kan)

New Hope キラリ Young Athlete 未来のナンバーワン!!

ゆあさ かなこ
湯浅 佳那子 (熊野町立熊野第二小学校6年)

生年月日:平成9年5月22日生(12歳) / 所属:熊野陸上スポーツ少年団 / 身長157cm・体重43kg
ベスト記録 / 80mH 13秒21 (全国小学生陸上競技交流大会 8位 県小新)
800m 2分31秒03 (広島県小学生総体 1位 県小新)



彼女は、4年生の時、熊野陸上スポ少に入団してきた。6年生とチームを組んで駅伝大会に出場し、区間賞の走りを見せ、信頼のおける長距離ランナーという第一印象を受けた。5年生でスピードをつけ、6年生になって800mで勝負だという構想で大会に挑み、広島県小学生総体5年生100m、6年生最初のレース織田記念陸上100m共に1位となり、短距離での頭角をどんどん現しはじめたのである。5年生からはじめた80mHの楽しさにもはまっていたので、スピードを活かして全国を目指すことにした。

コーチの指導を素直に聞き、週2回の練習日以外にも、自宅にハードルを持ち帰っての自主練習や、入浴後のストレッチなどアスリートの生活を家族の協力も得て本当によくがんばったが、8月は故障でほとんど練習ができないう状態であった。

「全国では予選通過したらいいね。」くらいの思いで横浜に行ったが、持ち前の負けん気の強さで、準決勝では県小学新を出して決勝に進み8位入賞となったのである。これは、サブグラウンドでテーピングと励ましの言葉をくださった、東広島陸上クラブの花守先生のお陰だということ、彼女は忘れてはいない。

広島県小学生総体での800mは、1ヶ月の練習で挑戦することになった。先にも述べたように、負けん気を發揮して勝負はできると確信していたが、県小学新でのフィニッシュは、現在、興譲館高校1年生の岡未友紀先輩(当団出身)も出すことができなかった記録であり、長距離選手としての才能も充分にあるということである。

この2つの県小学新により県陸協から新記録賞もいただき、彼女にとって陸上元年になったことは間違いない。これからは、『文走両道』規則正しい日常生活でアスリートの基礎を固め、短距離も長距離も楽しんで、将来のあり方をじっくり考え、いつかは子どもたちが憧れるアスリートになってほしいと、強く望んでいる。

持ち前の素直さと負けん気を發揮すれば大丈夫だよ! 佳那子さん!

熊野陸上スポーツ少年団 監督 熊野 孝則

